

戯曲

「バス待つ、ふたり」

作 ササキタツオ

《登場人物》

沖田真菜（17） 高校2年生

川村賢治（17） 高校2年生

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

《本編》

■ 第1場 ボッチとイジメ

○ 路上・バス停前

梅雨時の、昼。

バス停の前。

停留所のポールが立っている。

その脇で、文庫本を読んで待っている、

沖田真菜（17）。

真菜「待っている。待っている。私は何を待っている？ バスは来るのか来ないのか。誰か追いかけてくるのか来ないのか。バスは来ない。誰も来ない。何も待ってはいない。誰も、待っていない」

やってくる川村賢治（17）。

会釈する賢治。

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

無視する真菜。

賢治、真菜の隣に並ぶ。

鞆から英単語帳を取り出す賢治、読み始める。

賢治「(ぶつぶつと)ファイル。感じる。フォル。落ちる。フォル・イン・ラブ。恋に落ちる……」

賢治、チラッと真菜を見る。

真菜は本に向かっている。

賢治「あの……」

無視する真菜。

賢治「あの！」

真菜「……なんですか？」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「いえ……その……」

真奈 「……？」

賢治 「待ってるんですか？」

真菜 「はい？」

賢治 「バス」

真菜 「そう、ですけど……」

賢治 「そうなんですわね」

真菜 「そうです」

賢治 「よかった」

真菜 「はい？」

賢治 「バス来るんだな、って」

真菜 「来るんじゃないんですか？」

賢治 「どれぐらい、待ってるんですか？」

真菜 「はい？」

賢治 「バス」

真菜 「10分くらい」

賢治 「なるほど」

真菜 「はい」

賢治 「来ますかね？ バス」

真菜 「なんなんですか？」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「あ。いや。だからバスです」

真菜 「時刻表見たらいいじゃないですか」

賢治 「先に待っていたから」

真菜 「知りません」

賢治 「知らない？ 知らないで待つなんてこ
とあるんですか？」

真菜 「とにかく知りません」

賢治 「そうですか」

真菜 「私、時刻表、見てないんで」

賢治 「なるほど」

真菜 「はい」

賢治 「じゃあ、僕も」

真菜 「え？」

賢治 「待ちます」

真菜 「あなたは見てくださいよ。時刻表」

賢治 「なぜですか？」

真菜 「え？」

賢治 「僕も、別にいいかなって」

真菜 「よくないです。そういうの」

賢治 「そういうの？」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

真菜「ひとが見ないから、自分も見ないみた
いな」

賢治「待ちます」

真菜「よくない」

賢治「待ちます」

真菜「よくない！」

賢治「……じゃあ、見ます」

賢治、仕方なく、時刻表を見る。

賢治「んあー……」

真菜「え？」

賢治「(時刻表と腕時計と見比べて)なるほど。

そうですかー」

真菜「……どうなんです？」

賢治「え？」

真菜「バス」

賢治「来ますよ。たぶん」

賢治、並び直して、英単語帳を広げる。

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

真菜 「え。……いつ？」

賢治 「もうすぐ」

真菜 「もうすぐ？」

賢治 「もうすぐです」

真菜 「何分後、とか」

賢治 「自分で見たらいいじゃないですか」

真菜 「……は？」

賢治 「自分で、確認したらいいじゃないですか」

真菜 「……マジ、ふざけてる」

真菜、時刻表を見る。

真菜 「マジ！？ あと15分も来ないの！？」

賢治 「そうみたいです」

真菜 「ウソでしょ」

賢治 「こんな真昼間の、田舎の高校前のバス
停じゃあ、仕方ないですよ」

真菜 「そうだけど。マジか……時間の浪費」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「仕方ないです」

真菜 「知ってしまったと、なんかイヤ」

賢治 「見なければよかったですね」

真菜 「あなたね……」

賢治 「なんですか？」

真菜 「いいえ！」

元の位置に戻る、真菜。

本を読み始める。

賢治も単語帳を見返す。

賢治 「(ぶつぶつと) フィール。感じる。フォール。落ちる。フォール・イン・ラブ。恋に落ちる……なるほど」

真菜、気が散って、本を閉じる。

真菜 「あの！」

賢治 「はい？」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

真菜 「サボり、ですか？」

賢治 「え？」

真菜 「あなた」

賢治 「ああ」

真菜 「え？ どっち？」

賢治 「こんな昼間に帰るんですから。サボり、
なんじゃないですか？」

真菜 「なんなの」

賢治 「そちらは？」

真菜 「は？」

賢治 「サボりですか？」

真菜 「私は……そうだよ！」

賢治 「じゃあ、僕も。そうです」

真菜 「マジ、なんなの？」

賢治 「なんなんでしょうね」

真菜 「ふざけてる」

賢治 「坂の上の高校ですか？」

真菜 「そうだけど。そっちは坂の下か」

賢治 「はい」

真菜 「お互い、何サボってるんだらうね」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「僕は、自衛のためです」

真菜 「は？　じえい？」

賢治 「自分を守る、自衛です。自分の身は、自分で守らないといけない、ので」

真菜 「どういうこと？」

賢治 「(平然と)うちの高校。というか、僕のクラス。イヤなヤツばかりで。大変なんですよ」

真菜 「全然大変そうじゃない感じだけど？」

賢治 「本当に酷いと、なんか客観視してしま
うんですよ」

真菜 「イジメ、られてるの……？」

賢治 「……自分を守るために。僕は、サボる
という判断をしたままで。自衛です」

真菜 「……」

賢治 「そちらは？」

真菜 「私は……言わない」

賢治 「そうですか」

真菜 「……」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

視線が合う、二人。

荷物をまとめる真菜。

賢治「え？」

真菜「駅まで歩くわ」

賢治「駅、30分以上かかりますよね？」

真菜「歩く。それじゃ！」

真菜、去る。

賢治「……」

賢治、真菜の去った方を見つめる。

■ 第2場 ひとりと孤独

○ 路上・バス停

昼。雨が降っている。

バス停前。

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

傘を差した賢治がバスを待っている。
傘を差してやってくる、真菜。

真菜 「あ」

賢治 「ああ」

真菜 「雨だね」

賢治 「ですね」

真菜 「今日もサボり？」

賢治 「自分を守っています」

真菜 「そっか」

賢治 「はい」

真菜 「あと何分？」

賢治 「10分です」

真菜 「……ウソ、ついてないよね？」

賢治 「さあ。どうでしょう」

バス停の時刻表を確認する真菜。

真菜 「信じられない！ あと30分は来ない
じゃん。このウソつき」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「スミマセン」

真菜 「なんでウソつくかなあ」

賢治 「特に意味はないです」

真菜 「意味なくウソとか……わけわからん。

あ。そういうところじゃないの？」

賢治 「え……？」

真菜 「いじめられる原因。そういう嘘、よくないよ」

賢治 「そうですね」

真菜 「君、なんていうか、独特だしね」

賢治 「独特？」

真菜 「そ。独特」

賢治 「じゃあ、普通ってなんですか？」

真菜 「普通は、普通だよ。皆と同じこと笑ったり泣いたり、共感したり」

賢治 「誰かを、イジメたり……？」

真菜 「……知らんけど」

賢治 「だったら僕は、独特でいいです」

真菜 「そんなこと言っていると、ひとりになるよ」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「ひとりでいいです。むしろ、ひとりがいいです」

真菜 「君は、孤独を知らないね」

賢治 「知っていますよ」

真菜 「知らない」

賢治 「知ってます」

真菜 「じゃあどんな感じよ？」

賢治 「……ひとりの世界に閉じこもっている人」

真菜 「ウケる」

賢治 「違いますか？」

真菜 「違うよ。孤独っていうのはね、皆の中にいるのに溶け込めないでいることだよ。人の輪の中にいるのに存在していないよ。うな感覚。疎外感に押しつぶされそうになる。ひとりでいることとは違う」

賢治 「……あなたは、孤独なのですか？」

真菜 「……」

賢治 「孤独、なんですね……」

真菜 「……だったら、何？」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「逃げてるんですね。人の輪から」

真菜 「は？ 逃げてない。私は戦ってる」

賢治 「でも、サボってる」

真菜 「……君こそ、逃げてるでしょ。逃げて
いるうちは何もできないよ」

賢治 「……」

真菜 「それじゃ。私、行くわ」

賢治 「え？ また？」

真菜 「バイバイ」

賢治 「待ってください。僕も行きます」

真菜 「え？」

賢治 「歩くのと変わらないから」

真菜 「そ。なら。私、残る」

賢治 「え？」

真菜 「君とは一緒に行かない」

賢治 「……そうですか」

真菜 「はい」

賢治 「それじゃあ……僕は、行きます。サヨ
ナラ」

真菜 「バイバイ！」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「サヨナラ……」

賢治、去る。

真菜、ため息をつく。

雨が強くなつていく……。

雨空を仰ぐ真菜。

■ 第3場 バス待つ、ふたり

○ 路上・バス停

晴れ。

セミの鳴き声が聞こえる。初夏だ。

バス停でバスを待っている賢治。

やってくる真菜。

真菜 「よ」

賢治 「どうも」

真菜 「最近、会わなかったね」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「はい」

真菜 「どうしてた？」

賢治 「別に」

真菜 「今日も、逃げてきたってワケ？」

賢治 「……」

真菜 「君の世界は今日も残酷かあ」

賢治 「……そちらは？」

真菜 「私は、今日も、孤独な世界の中で戦っている」

賢治 「そうですか……」

真菜 「なに？ 言いたいことがあるなら、ハッキリ言いなさいよ」

賢治 「孤独でも、沈んでいない、あなたはスゴイです」

真菜 「なに急に。気持ちわる」

賢治、真菜に向き合う。

賢治 「……僕も戦いました。戦ってきたんです……！」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

真菜 「え？」

賢治 「イジメてくる奴らと」

真菜 「……」

賢治 「言ってやりました。なんでイジメるのか？ って。聞いただしてやりました」

真菜 「……マジ!？」

賢治 「でも、僕の負けでした。イジメはエスカレートして、殴られ、蹴られ……。僕は、高校を辞めることにしました」

真菜 「またまた。君の事だから嘘ついてるんでしょ？」

賢治 「ウソだって思ってもらっても構わないですけど。これは、本当です。僕、高校辞めます」

真菜 「……」

賢治 「今日でここに来るのも、最後です」

真菜 「……」

賢治 「だから。その……あなたに、お別れを言いたくて」

真菜 「……お別れ？」

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

再度、真菜に向き合う賢治。

賢治「僕は、あなたのおかげで逃げるのをやめることができました。戦うことができました
した」

真菜「……」

賢治「逃げているうちは何もできない。本当にそうだったから。だから、あなたに会えてよかった……！」

真菜「……」

賢治「それじゃ、僕、行きます」

真菜「え……？ 行っちゃうの？」

賢治「はい」

真菜「バスは？」

賢治「来ません。あと30分」

真菜「……」

賢治「サヨナラ」

賢治、去ろうとする。

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

真菜、賢治を引き留める。

真奈「待とうよ！」

賢治「え……？」

真菜「バス待とう。今日くらい。最後くらい。」

一緒にバス乗って、帰ろ……！」

少しの間。

賢治「……なんか告白みたいですね」

真菜「違うし」

賢治「すみません」

真菜「ただ。君の勇氣、認める。認めるって

こと！」

賢治「だから告白みたい」

真菜「違う！」

プンと怒って、バスを待つ、真菜。

賢治、真菜の隣に並ぶ。

戯曲「バス待つ、ふたり」
作 ササキタツオ

賢治 「すみません。ありがとうございます」

真菜 「わかれば、よろしい」

本を取り出す、真菜。

参考書を取り出す賢治。

お互い、会釈して、読み始める。

(終)